



## コスモス国際賞受賞候補者推薦要項

### 1. 授賞の対象

花と緑に象徴されるすべての生命現象に関し、地球的視点における生命体相互の関係性、統合性の本質を解明しようとする研究や業績。

具体的には、自然界における生命のさまざまなありよう、および、それらと人間とのかわり、自然の一員としての人間の文化や文明活動等に関する研究や業績であって、「自然と人間との共生」の理念の発展に貢献すると認められるものを対象とし、以下の基準に基づいて選考を行う。

——対象とする分野

- ① 自然科学、人文・社会科学など幅広い分野の研究。
- ② 賞の理念に関連する思想、芸術、論評等の業績。

——選考で重視する点

- ① 地球的視点に立ったものであること。特定の地域や個別的現象に関するものであっても普遍性があること。
- ② 直接的な問題解決型ではなく、長期的な視点をもつものであること。
- ③ 包括的、統合的な方法によるものであること。

### 2. 候補者の資格

国籍、人種、性別、信条を問いません。ただし、現存者に限ります。

### 3. 推薦の手続き

- ① 以下3つの方法にてご推薦いただけます。

■手書きでのご推薦

同封の推薦書にご記入の上、返信用封筒、Eメール添付、FAXにてお送りください。

■WEB推薦システムからのご推薦(花博記念協会ホームページ)

「コスモス国際賞」のページ内にある「2019年コスモス国際賞WEB推薦について」のページに入り、「A. web推薦フォーム」をクリック、郵送済の推薦書類に記載されておりますパスワードをご入力ください。

■Microsoft Wordファイルへの入力でのご推薦(花博記念協会ホームページ)

「コスモス国際賞」のページ内にある「2019年コスモス国際賞WEB推薦について」のページに入り、「B. Word推薦フォームダウンロード」をクリック、郵送済の推薦書類に記載されておりますパスワードをご入力ください。

- ② 複数件のご推薦も受け付けいたします。
- ③ 候補者の業績に関する参考資料もできる限り添付していただきますようお願いいたします。

### 4. 推薦の有効期間

ご推薦いただいた候補者は、3年間、本国際賞の候補者として資格を持ちます。

### 5. 推薦締め切り 2019年4月12日(必着)

### 6. 送付および問合せ先

コスモス国際賞事務局 担当:金森  
(公財)国際花と緑の博覧会記念協会

〒538-0036 大阪市鶴見区緑地公園2-136

TEL:06-6915-4513 FAX:06-6915-4524

Email:rec-cosmos@expo-cosmos.or.jp



## コスモス国際賞

### ☆創設

1990年に大阪で開催された花の万博を記念し、その理念である「自然と人間との共生」の継承、発展を目的に1993年に設立した国際賞です。

### ☆趣旨

人間が自然を尊び、これと調和しながら生きる「自然と人間との共生」というEXPO'90のテーマは、地球上のすべての生命あるもの、および、その生命活動を支える地球を一体のものとして捉え、この「地球丸」の航路を、正しく見定めようとするアピールであった。

このような共生のあり方の理解のためには、すべての生命現象に通ずる多様の中の統一性、生命体と地球との相互依存の関係性を解明することが重要である。しかし、この解明には、これまでの科学の主流であった分析的、還元的な方法だけでは不十分であって、統合的、包括的な手法による新しい取り組みが必要である。

我々はとくに、地球的視点からの統合的な方法論の重要性を提起したい。そして、この研究分野における優れた業績を発掘し評価し、これを顕彰することによって新しい価値観の潮流を促進し、その結果を人類共通の稔りある土壌たらしめたいと思う。

花は緑の精、緑は生命の象徴である。

コスモス国際賞は、その理念を発展させ、地球と人類の明日に貢献したいと願っている。

### ☆顕彰対象

人間が自然を尊び、調和しながら生きる「自然と人間との共生」という理念の継承、発展に寄与する業績を顕彰します。これまでの分析的、還元的な研究だけではなく、21世紀の新しい科学的視点、つまり統合的、地球的な視点、または長期的な視点に立った業績に光をあてるものです。

授賞の対象分野は、自然科学、人文・社会科学や芸術的分野まで多岐にわたります。

### ☆選考

内外の学識経験者等からなる「コスモス国際賞委員会」とそのもとに「コスモス国際賞選考専門委員会」を設けています。それらの組織で世界各国からの推薦が審査され、受賞者が決定されます。

### ☆賞の内容

毎年、原則として1個人または1チームを表彰します。受賞者には賞状、メダルと副賞4,000万円を贈ります。

### ☆名称

賞の名称「コスモス」は、秋桜（コスモス）が咲き乱れる会場で閉幕を迎えた花の万博を記念する意味と、その理念である「自然と人間との共生」の考え方につながる「秩序ある宇宙」（Kosmos）を示しています。

## コスモス国際賞委員会

(2019年2月1日現在)

委員長	岸本 忠三	大阪大学免疫学フロンティア研究センター特任教授
副委員長	尾池 和夫	京都造形芸術大学学長
委員	秋道 智彌	山梨県立富士山世界遺産センター所長
	浅島 誠	帝京大学特任教授
	池内 了	総合研究大学院大学名誉教授
	磯貝 彰	奈良先端科学技術大学院大学名誉教授
	佐々木 恵彦	公益財団法人 国際緑化推進センター理事長
	武内 和彦	東京大学大学院理学系研究科特任教授
	西澤 直子	石川県立大学生物資源工学研究所教授
	林 良博	独立行政法人 国立科学博物館館長
	鷺谷 いづみ	中央大学理工学部教授

### ☆これまでの受賞者

- 1993年（第1回） **ギリアン・フランス 卿**  
英国 王立キュー植物園園長  
南米アマゾン地域を中心とする熱帯植物研究の権威。地球全域の植生を統一データ化する地球植物誌計画を提唱、世界の植物学者とネットワークを組んで実現に努力した。
- 1994年（第2回） **ジャック・フランソワ・バロー 博士（故人）**  
フランス パリ国立自然史博物館教授  
太平洋の島々の自然と人たちの暮らしについて民族生物学的な調査研究を行い、これを基に、人間と食糧をテーマに、全地球的な視点から、ユニークな考察を発表した。
- 1995年（第3回） **吉良 龍夫 博士（故人）**  
日本 大阪市立大学名誉教授  
光合成による植物の有機物生産の定量的研究を基に、生態学の新分野となる生産生態学を確立。東南アジア地域の熱帯林生態系の研究で指導的な役割を務めた。
- 1996年（第4回） **ジョージ・ビールズ・シャラー 博士**  
米国 野生生物保護協会科学部長  
40年にわたり、世界各地でさまざまな野生動物の生態と行動を研究。「マウンテンゴリラ・生態と行動」「ラストパンダ」など数多くの著書で全世界に野生動物の実態を知らせた。
- 1997年（第5回） **リチャード・ドーキンス 博士**  
英国 オックスフォード大学教授  
1976年に出版された著書「利己的な遺伝子」で、生物学の常識をくつがえす大胆な仮説を発表。その後も、生物の進化について新しい見解を提示して学界に論争を起こしている。
- 1998年（第6回） **ジャレド・メイスン・ダイヤモンド 博士**  
米国 カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授  
医学部で生理学を研究する一方、30年にわたりニューギニアの熱帯調査を行い、これらを基に、人類の歴史的な発展を再構成したユニークな考察を発表した。
- 1999年（第7回） **呉 征鎰（ウー・チェン・イー） 博士（故人）**  
中国 中国科学院昆明植物研究所教授・名誉所長  
中国を代表する植物学者。中国を拠点に東アジア地域の植物の調査研究に取り組み、中国全土の植物の種の多様性を網羅する「中国植物誌」の編集を主導、刊行を実現させた。
- 2000年（第8回） **デービッド・アッテンボロー 卿**  
英国 映像プロデューサー  
野生生物のドキュメント映像のバイオニア。BBC時代から退社後を含め、約半世紀にわたって、地球上の野生の動植物の生の姿を、優れた映像で全世界に伝えた。
- 2001年（第9回） **アン・ウィストン・スパーン 教授**  
米国 マサチューセッツ工科大学教授  
都市と自然は対立するものでなく、周辺の地域環境と調和し、その一部として存在する都市の構築が可能であるとし、都市が自然との調和を図りながら発展する方策を示した。
- 2002年（第10回） **チャールズ・ダーウィン 研究所**  
ガラパゴス諸島の陸上、海域両面にわたる生物と生態系の調査を行い、島の自然を守る直接活動のほか、島の住民への環境教育、島の現状を全世界に伝える出版など、多角的な活動を行った。

- 2003年（第11回） **ピーター・ハミルトン・レーブン 博士**  
 米国 ミズーリ植物園園長  
 米国を代表する植物学者で、地球の生物多様性の保全を提唱した国際的な先駆者。常に地球的な視点で生命の問題を考え、学術と実践両面で自然と人間との共生に貢献した。
- 2004年（第12回） **フーリャ・カラビアス・リジョ 教授**  
 メキシコ メキシコ国立自治大学教授  
 途上国の立場から全地球的な環境問題を考え、フィールドワークとさまざまな学問分野の研究を統合したプログラムを実施し、異なる条件下での困難な課題に優れた成果を挙げた。
- 2005年（第13回） **ダニエル・ポーリー 博士**  
 カナダ ブリティッシュ・コロンビア大学水産資源研究所所長兼教授  
 漁業と海洋生態系の関連を包括的に研究。海洋生態系保全と水産資源の持続的利用を可能にする科学的モデル開発など、海洋生態系と資源研究の分野で優れた業績を収めた。
- 2006年（第14回） **ラマン・スクマール 博士**  
 インド インド科学研究所 生態学センター教授  
 ゾウと人間との生態関係や軋轢への対処をテーマとした研究から、生物多様性保護と自然環境の保全全般にわたる多くの提言を行い、かつ実行し、野生生物と人間との共存という分野での先駆的な取り組みを行った。
- 2007年（第15回） **ジョージナ・メアリー・メイス 博士**  
 英国 ロンドン大学自然環境調査会議個体群生物学研究センター所長兼教授  
 絶滅危惧種を特定・分類し、科学的な基準を作成することにおいて指導的役割を果たし、種の保全、生物多様性保全に大きく貢献する取り組みを行った。
- 2008年（第16回） **ファン・グエン・ホン 博士**  
 ベトナム ハノイ教育大学名誉教授  
 戦争や乱開発がマングローブの生態系に壊滅的な打撃を与えたベトナムで、マングローブの科学的、包括的な調査・研究を行い、マングローブ林の再生に大きな成果を挙げた。
- 2009年（第17回） **グレッチェン・カーラ・デイリー 博士**  
 米国 スタンフォード大学教授  
 生物多様性のもつ「生態系サービス」の価値を包括的に捉えるとともに、生態学・経済学を統合し、自然資本の持続的な利用のために「自然資本プロジェクト」を実施する等大きな役割を果たした。
- 2010年（第18回） **エステラ・ベルゲレ・レオポルド 博士**  
 米国 ワシントン大学生物学部名誉教授  
 父アルド・レオポルド氏（1887-1948）が提唱した「土地倫理」を継承・追及すると共に、アメリカ各地においてこの考えを広げるなど、多大な功績を残した。
- 2011年（第19回） **米国 海洋生物センサス科学推進委員会**  
 全世界における海洋生物の多様性についての現在・過去を調査・解析し、海洋生物の将来を予測するという壮大な国際プロジェクト「海洋生物センサス」を主導した。
- 2012年（第20回） **エドワード・オズボーン・ウィルソン 博士**  
 米国 ハーバード大学名誉教授  
 アリの自然史および行動生物学の研究分野で卓越した研究業績をあげ、その科学的知見を活かして人間の起源、人間の本性、人間の相互作用の研究に努めた。
- 2013年（第21回） **ロバート・トリート・ペイン 博士（故人）**  
 米国 ワシントン大学名誉教授  
 生物群集の安定的な維持に捕食者の存在が不可欠なことを、明快な野外実験によって示し、キーストーン種という概念を提唱したことにより、生態学はもとより保全生物学や、一般の人々の生物多様性への理解に大きな影響を与えた。
- 2014年（第22回） **フィリップ・デスコラ 博士**  
 フランス コレージュ・ド・フランス教授  
 人類学者として、南米アマゾンに住む先住民アチュアの自然観とその自然と関わる諸活動に焦点を当て、これらの綿密な調査から哲学的な思想へと論を進め、自然と文化を統合的に捉える「自然の人類学」を提唱した。
- 2015年（第23回） **ヨハン・ロックストローム 博士**  
 スウェーデン ストックホルム・レジリエンス・センター所長  
 人類が地球システムに与えている圧力が飽和状態に達した時に不可逆的で大きな変化が起こるとし、プラネタリーバウンダリーを把握することで、壊滅的な変化を回避でき、その限界がどこにあるかを知ることが重要であるという考え方を示した。
- 2016年（第24回） **岩槻 邦男 博士**  
 日本 東京大学名誉教授  
 地球に存在する多様な生物の相互関係を統合的に解明する研究手法の構築により、シダ類をはじめとする植物系統分類学を発展させ、さらにアジアを中心とする生物多様性の保全に多大な貢献を果たした。
- 2017年（第25回） **ジェーン・グドール 博士**  
 英国 ジェーン・グドール・インスティテュート創設者  
 1960年から、野生チンパンジーの研究を続け、その全体像を明らかにするとともに、チンパンジーが住む森を保全するための植林活動や環境教育活動を行った。博士が創案した青少年が担い手となる環境教育プログラム「ルーツアンドシューツ」は99カ国で約15万団体が、その活動を展開している。
- 2018年（第26回） **オギュスタン・ベルク博士**  
 フランス フランス国立社会科学高等研究院教授  
 和辻哲郎の著作「風土」から大きな影響を受け、風土概念をさらに拡充、深化、発展させ、「風土学 (mésologie)」と名づけられる新たな学問領域を切り拓き、自然にも主体性があるという「自然の主体性論」を提唱した。